

SDGsの視点からの学習活動研究部会 研究活動記録

中間報告書 研究編  
小学校

一般財団法人栃木県連合教育会

令和6年9月

### 3 校種毎の調査結果に基づいた考察【小学校】

#### 【小学校】

#### 1. 各小学校が実施している SDGs に関する取り組みについてのアンケート結果からの考察

県内すべての小学校に依頼（回答は任意）したアンケートの回答が 205 校からあった。この結果をもとに、各校で実施している SDGs に関する取り組みについて述べていく。

まず回答者の内訳は学校長 24 名、教頭・副校長 86 名、主幹教諭 3 名、教諭 90 名、講師 2 名である。

「SDGs に関する指導について、校務分掌に位置付けられているか」の問いには、「位置付けられている」と回答したのが 154 校、「位置付けられていない」と回答したのが 51 校だった。「位置付けられている」と回答した学校にその分掌名を問うと、「環境教育」と回答した学校が 40 校と約 25%を占めた。他には、「人権教育」と回答した学校が 5 校、「生涯教育」や「キャリア教育」と回答した学校が 1 校ずつあった。中には「SDGs 推進リーダー」や「SDGs プロジェクト」と回答した学校が合わせて 4 校、教務主任が担当していると回答した学校もあった。この設問の結果から分かることは、「SDGs=環境」という印象が教員あるいは学校全体に強く意識されていると感じられる。

「SDGs と学校行事を関連させた取り組みを行っているか」の問いには、「行っている」と回答した学校が 119 校、「行っていない」と回答した学校が 86 校だった。「行っている」と回答した学校にその取組内容を問うと、最も多かったのは 11 校が回答した「リサイクル」だった。次に多かったのは、8 校が回答した「総合的な学習の時間」、「集会」であり、集会の内容は各種委員会による「環境集会」や「人権集会」である。他には「アルミ缶回収」、「資源物回収」、「クリーン活動」という回答も目立った。また、詳細までは記入されていなかったが、修学旅行や臨海自然教室で SDGs と関連させた活動を実施している学校もあることが分かった。この設問からも、「SDGs=環境」という印象が教員あるいは学校全体に強く意識されているということがいえるだろう。さらに、この設問では「人権」というキーワードが見られるようになった。

「SDGs に関する内容を扱う場合、学校として困難な点はどのような点か」の問いでは、「他の業務で多忙なため SDGs に関する教育の準備に割く時間が確保できない」という回答や、「年間指導計画や校務分掌、指導要領に明確に設定されていないので実施が難しい」といった回答があった。また、教員の知識不足を懸念する回答も見られた。多くの教科指導や学校行事の準備等、日々多忙を極める小学校の教育現場において、新たな取組に意欲的に向き合うことが難しい教員も少なくないという現実を再確認する結果となった。

「SDGs に関する内容を扱ったことがある場合、学校としてよかった点はどのような点か」の問いに対しては、「環境問題に対する児童の意識が高まった」という回答が多かった。ここでも「環境」というキーワードが目立ち、小学校の教育現場で「環境問題」は SDGs と関連させやすいと推察される。また、この設問では「グローバルな視点」、「異文化理解」の語句を含む回答もあり、環境問題以外の SDGs に関する取組でよさを感じている教員もいるということが分かった。

自由記述の設問では、学年に応じた実施内容を記入している学校が 14 校と最も多かったが、注目すべきは次に多かった「教育課程に位置づけたい」という 14 校の回答である。先の設問で、多忙感や不明確なために実施が難しいという回答も見られたが、反面、教育課程や年間指導計画に明確化されていれば実施したいという意欲的な意見も少なからず存在していることが分かった。

### 3 校種毎の調査結果に基づいた考察【小学校】

#### 2. 県内小学校教員に対して実施した SDGs についてのアンケート結果からの考察

続いて、県内 534 名の小学校教員の回答を見ることにする。「SDGs についてどれくらい知っているのか」の問いには、「よく知っている」と回答した教員は 59 名（約 11%）、「少し知っている」と回答した教員は 413 名（約 77.3%）、「どちらとも言えない」と回答した教員は 35 名（約 6.5%）、「あまり知らない」と回答した教員は 25 名（約 4.6%）、「全く知らない」と回答した教員は 2 名（約 0.3%）だった。

「よく知っている」と回答した教員と「少し知っている」と回答した教員を合わせると約 9 割の教員は SDGs についての知識が少なからずあるという自覚をもっているという結果が得られた。

しかし、次の「これまでに行った SDGs に関する授業や活動」の問いには、210 名しか回答していない。先の設問では約 9 割の教員が「SDGs に関する知識はある」と回答していたにも関わらず、SDGs に関する授業や活動については半分以下の教員しか指導経験がないということになる。授業や活動を行ったことがある教員の回答を見ていくと、「環境」の語句が含まれた回答が 61 件と最も多く、次に多いのは「食」の語句が含まれた回答で 31 件である。やはり「環境」というキーワードは変わらず多く見られるものの、この設問では新たに「食育」と SDGs を関連させて指導しているという回答が見られた。詳細を見ると、給食指導や「食品ロス（フードロス）」に関する授業、給食委員会による発表や集会を実施したことがあるという回答が見られた。しかし、「人権」という語句を含んだ回答は 2 件しかなく、前項の学校全体での行事や活動では人権について扱われることがあるものの、学級単位になると「人権」と SDGs を関連させた活動や授業がほとんど見られなくなった。また、ここでも「ゴミ（ごみ）」や「エネルギー」、「エコ」などといった「環境」に関するキーワードが合わせて 42 件見られ、回答数の約 3 分の 1 を占める結果となった。このことから SDGs を小学校の授業や活動で取り扱う上で、「環境」というものは扱いやすいもしくは前項で述べた「SDGs=環境」という印象が教員あるいは学校全体に強く意識されているといえる。また、「福祉」の語句を含んだ回答は 6 件あった。

SDGs に関する授業を実施した教科を見ていくと、「総合的な学習の時間」が 82 件と最も多く、次に多いのは「社会」で 38 件、その次は「国語」で 19 件であった。ここから考えられることは、以上の 3 教科は学習内容と SDGs を関連付けながら授業を展開しやすいということである。次に多かったのは「家庭」の 16 件、「理科」の 13 件と続いた。この 2 教科に関して言えることは、家庭科は「食」について、理科は「環境」について、各学年で単元が設定されているということである。よって、自然と SDGs に関する授業を実施しているという教員の意識に繋がってくる。なぜなら今まで述べてきた通り、教員間に「SDGs=環境」という印象が強く意識されていると考えられるからである。そのため、教科書等に「環境」について考える単元がほとんど表出することがない「図工」は 4 件、「外国語（英語）」は 2 件、「音楽」は 1 件と明らかに少ない。「図工」では授業内容としてペットボトルや牛乳パックなどを「リサイクル」して作品を作るという回答が見られた。ここでもやはり「環境」に着目されている。「体育」と「算数」に関しては 0 件である。「道徳」については教科書に「国際理解、国際親善」や「相互理解、寛容」、「自然愛護」など SDGs に関連づけることができる内容項目が明記されているにも関わらず、8 件しか回答がなかった。

自由記述の設問では、無記入や「ありません」などの回答が合わせて 507 件と約 95% を占めたが、回答の中で多かったものには、「教材や実践例が必要」が 10 件、「指導することが難しい」が 9 件見られた。やはり前項と同様に、SDGs に関する授業や活動に難色を示している教員が存在していることが分かった。

### 3 校種毎の調査結果に基づいた考察【小学校】

#### 3. 県内小学生に対して実施した SDGs についてのアンケート結果からの考察

最後に、県内 5397 名の児童の回答結果から分かることを述べていく。

「SDGs という言葉を知っているか」についての問いについて、「知っている」と答えた児童は 3673 名（約 68%）、「少し知っている」と答えた児童は 1127 名（約 20.8%）、「あまり知らない」と答えた児童は 325 名（約 6%）、「まったく知らない」と答えた児童は 272 名（約 5%）だった。「知っている」と「少し知っている」と回答した児童を合わせると、県内小学生の約 9 割の児童が「SDGs」という言葉について少なからず知っているという結果となった。「知っている」「少し知っている」と回答した 4800 名の児童を対象に「SDGs という言葉をどこで知ったか（複数選択可）」を問うと、最も多かったのは「テレビ」で 3725 件、次に多かったのは「学校」で 3112 件だった。情報番組のみならずバラエティ番組等でも取り上げられることも多いことから、テレビで知ったという児童が多くなったのではないかと考えられる。次いで多かったのは「インターネット」で 2810 件、その次は「本」の 1877 件となった。インターネットや本は、学校の「総合的な学習の時間」や「社会」の授業の中で調べ学習をする際に用いたのではないかという予想が立てられる。その後は「先生」1654 件、「家の人」1164 件、「図書館」858 件、「友だち」552 件、「お店」487 件と続いた。

「SDGs について取り組んでいること」についての設問には、様々な回答を得ることができた。最も多かったのは「ポイ捨てをしない」という回答で、626 名が記述していた。次に多かったのは「水」の語句に関する言葉が含まれる回答で、452 名が記述していた。具体的には「水を無駄にしない」、「節水している」、「水を大切に使う」という内容だった。その次に多かったのは「食」の語彙が含まれる回答で、446 名が記述していた。具体的には「好き嫌いせずに食べる」、「食べ残しを減らす」、「食べ切れる量にする」という内容だった。その次に多かったのは「海」の語彙が含まれる回答で、385 名が記述していた。海なし県に住む県内児童からこの回答が 4 番目に挙げられたことは意外だった。要因として考えられるのは、教科書に記載の多い海洋プラスチックの写真が児童に大きなインパクトを与えているのではないかということだ。ここまで考えられることは、児童も前項の教員同様「SDGs＝環境」という印象が強く意識されているということである。また、前項で教員が「これまでにを行った SDGs に関する授業や活動」の回答の中で用いていた言葉で最も多かったのが「環境」、次いで多かったのが「食」であった。この結果と今回の設問の児童の回答傾向は重複していることが分かる。予想外だったのは、「海」の次に多かった回答が「平等」を含む記述だったことだ。これは学校や教員による回答では少数だったからである。児童の意識は SDGs の 17 の目標の中の「5. ジェンダー平等を実現しよう」「10. 人や国の不平等をなくそう」にも向けられているということが分かる。

「未来の地球の住みやすさを 5 段階で表すと」の問いには、「5」が 1955 名（約 36.2%）、「4」が 1307 名（約 24.2%）、「3」が 1002 名（約 18.5%）、「2」が 817 名（約 15.1%）、「1」が 316 名（約 5.8%）だった。段階を示す数字が大きくなるほど回答数も多くなり、児童たちが未来の地球の住みやすさについて希望をもっていることが分かる。回答の理由について 17 の目標に分類してみると、最も多いのは「9. 産業と技術革新の基盤をつくろう」で 1027 件だった。内容については、「科学技術の発展」によって住みやすくなる未来を想像する回答が多かった。次に多いのは「7. エネルギー」で 1019 件、その次に多いのは「13. 気候変動」で 919 件だった。自分たちが取り組んでいる内容については「環境」や「食」、「平等」についての回答が多かったが、地球の住みやすさについては「科学の発展」が大きく起因していると考えている児童が多いという結果が得られた。

### 3 校種毎の調査結果に基づいた考察【小学校】

#### 4. 考察のまとめと今後の展望

ここまで学校全体、教員、児童に関する SDGs についてのアンケート結果から分かることを考察してきた。以下に今回の調査から得ることができた結果をまとめる。

①多忙な業務や、教育課程に明記されていない等の理由から SDGs に関する活動に対して難しさを感じていること。②SDGs に関する知識がある自覚はある教員は多いが、SDGs に関する授業や活動を実施している教員は少ないこと。③SDGs に関連づけた「環境」や「食」を扱う単元の授業や指導は実施しやすいこと。④小学校教員あるいは小学校全体、児童にまで「SDGs＝環境」という印象が強く意識されていること。⑤児童の意識は 17 の目標の中の「5. ジェンダー平等を実現しよう」「10. 人や国の不平等をなくそう」にも向けられていること。⑥「住みやすさ＝科学の発展」というイメージをもつ児童が多いこと。

教員が SDGs に対して先に述べたような「SDGs＝環境」という印象をもったまま SDGs に関する授業や活動を実施した場合、それがそのまま児童たちの SDGs に対する知識となって堆積していつてしまっているという現状が明らかになった。SDGs には 17 の目標があり、取り組むべき内容は多岐に渡る。児童たちが SDGs についての理解を深めるためには、小学校の教育現場においても現在の「環境」や「食」における SDGs に関する授業や活動だけでなく、17 の目標全体に視野を広げることで、あらゆる授業や活動を SDGs と関連づけていくことが、これからの時代では小学校教育に求められるだろう。しかし、これまで述べてきている通り、小学校教員の業務は多忙を極める。現代社会では働き方改革も重要視されており、それは教育現場においても推進されているところである。新たなものを多く取り入れて教員の準備や計画に大きな負担をかけてしまつては本末転倒である。そこで、教育課程や年間指導計画に SDGs に関する文言を組み込んだり、現在進行形で実施されている活動や行事に SDGs の 17 の目標を関連づけたりすることで、教員に大きな負担をかけることなく、小学校教育の中でも SDGs に関する授業や活動を実施していくことができるのではないかと考える。

教員から得られた回答から分かる通り、前例がないものや計画に組み込まれていないものについては実施に難しさを感じる教員が多い。よつて、小学校における SDGs に関する新たな授業や活動の前例を作っていくことが本部会の今後の目標となるだろう。具体的には、SDGs に関する授業や活動の取り組みのうち、本調査では回答がなかった 17 の目標の中から指導内容を選択し、授業や活動を実践して広めていくことが必要であるとする。もちろん児童たちの「主体性」を伸長していくためには、児童たちが自ら研究テーマを設定する授業展開も効果的であるので、その場合は教員側が 17 の目標のうち教科書などで触れられていない目標をテーマ設定することを促す役割を果たすことも考えられる。

また、SDGs に関する授業や活動を行ったことがある教員の中で、実施した教科に関する回答があつたが、17 の目標のうち扱いにくい内容に着目するだけでなく、SDGs を関連づけることに一見困難を感じる教科に着目した実践例を作ることも大切ではないかと考える。

また、前項で述べた通り「地球の住みやすさ」とは「科学の発展」であると考えている児童が多いことが分かつた。SDGs を自分事として捉えている児童は案外多いと思つたが、「ごみを分別する」や「男女関係なく仲良くする」、「好き嫌いせずに食べる」など思考は「身の回り」のことを考えた「日本基準」に留まつており、「世界の国々のために」「地球のために」などといった「世界基準」で捉えることができていないのかもしれない。最終的には児童たちが「SDGs の達成＝地球の住みやすさ」ということを理解するための指導が求められると考える。